

双方向推論法

滋賀大学経済学部 近藤 豊将

逆向き推論法（バックワード・インダクション）という思考方法がある。有限のステップで終了する問題に適用可能な思考法だ。最終段階は、最適に処理されなければならない。（有限のステップで終了する問題なので、最終段階が存在する。）そのためには一段階前には、こういう状態でなければならない。そのためには、そのもう一段階前は、…そのために最初にやるべきことは、という具合に、時間の流れとは逆向きに、やるべきことを順に割り出していく推論法である。

例として、学生が英語を勉強する場合に適用してみよう。最終目標はテストでいい点を取ることではない。意思伝達のツールとして自在に活用することだろう。ビジネスの現場で生かすことができれば望ましい。ビジネス・チャンス在国内のみに限定するのではなく海外にも広げることができれば、より良いマッチングや効率的な仕事の運営も可能になるはずだからだ。そのためには、^{こい}語彙力を増強しなければならない。語彙力強化のためには、基本的な単語は記憶しなければならない。そのためには、定期的に試験を受けることで勉強のペースをつかむのが効果的である。というように逆向きに考えていくのである。

逆向き推論法は、経済学部専門課程のゲーム理論や上級マクロ経済学で学ぶ事柄であるが、その直観的な意味内容は、先に示した通り極めてシンプルなものである。中学生でも理解可能だろう。だが、それを実践するためには、難点がひとつある。将来目標が確定していなければ、その先の戦略を立案することができないのだ。

では、（現在時点において）将来目標はいかにして定めればよいのか。これが多くの若い人達にとって悩ましい問題なのではないだろうか。野球選手になる場合と総理大臣になる場合とでは、今やるべきことが異なってくるということは誰にでも理解できるが、はつきりした将来ビジョンを定めるのはなかなか難しい。ゆえに、今やるべきことを割り出すのも難しい。

このようなときには、「今できることをやる」というのが正解の選択肢のひとつではないだろうか。将来が見えてこないからといって、ただ手をこまねいていても事態は改善され得ないからだ。「できることから手を付けつつその延長線上に将来ビジョンを見出す」、もしくは、「動きながら（行動をおこしながら）先を考える」というのが有望な打開策のように思える。そして、将来像がある程度明確に見えるようになったら、逆向き推論法を適用すればよいのだ。

「逆（将来）から考える」と「今（現在）できることは何かを考える」の併用、つまり、双方向推論法である。なかなか進路を決めることができない学生などにとり、このように二方向から考

えてみるだけでも思惟しゆいの幅が少しは広がるだろう。

ひとたび目標を見出せたなら目の覚めるような力を発揮できる人材はかなり多いはずだ。だが私見ではあるが、目標を見出せないがゆえに、力の入れどころがわかっていない学生が少なくない。これは、有効活用できていない莫大な資源が世に眠っていることを示唆する。徳川埋蔵金など比ではあるまい。その発掘は、個々人の幸福にも、そして世界益にも適かなうことであろう。

(平成二十四年八月十八日)